

---

# エヴァと万事屋銀ちゃん

岸 劉生

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

エヴァと万事屋銀ちゃん

### 【Nコード】

N6193V

### 【作者名】

岸 劉生

### 【あらすじ】

時は14世紀のヨーロッパ。十歳の誕生日に吸血鬼になったエヴァンジェリンは魔法使いたちに追われながら必死に生きていたが、ある日のことついに追い詰められ崖の下へと落とされる。

崖の下へと落ちていく中、彼女の生きたいという願いを聞いて、哀れに思った神は彼女の願いを聞き入れて、こことは違う銀魂の世界へと飛ばされてしまう。

人間不信に陥っていたエヴァンジェリンは最初は銀時たちにも心

を開かなかったが、次第に彼らの優しさに触れ、心を開いていくエヴァンジェリン。

これはそんな彼女が過ごす暖かな日々を書いた物語である。

## 第0訓 万事屋出動と消えた吸血鬼

時は14世紀のヨーロッパ。

深い森の中を必死に逃げ惑う幼い少女の姿がそこにあった。足下まで届く長いウェーブがかった金髪を揺らしつつ、少女は必死に背後から自分を追ってくる追跡者から逃げる。

「ハア、ハア、ハツ、ハア……………」

荒く息を吐きつつ、肩口に負った傷口から溢れる血を止めようと直接傷口を押さえるが、走る度に身体に走る激痛に顔を顰める。

すると、後方から浴びせられる魔法や矢による攻撃が少女を襲う。

「あ、あう、う　あ……………」

背中を強力な炎魔法で焼かれる感触、鋭い鋸が皮膚を切り裂く感触。それは幼い少女にとって耐え難いものであった。それでも自分は逃げるのを、走るのを止めるわけにはいかない。

「に、げなきや……………はやく、ここから……………」

少女は血だらけの身体を懸命に動かしながら、前へ前へと少しずつであるが確実に進んでいく。追っ手たちは少女の姿を見失ったのか、少女を捜す怒号が森中に響く。

その隙を逃がさず少女はこの場から逃れたのであった。

「はあ……、ここまで来れば大丈夫、なはず……」

少女が避難した場所は森を抜けたところにある泉の辺であった。泥だらけの身体を見下ろし、少女は皮肉そうに笑った。

今の自分にはお似合いの姿だ……。醜い化け物……。吸血鬼に成り下がってしまった自分には。

でも……。少女は泉へと身体を乗り出して、泉の水に映った自分の顔を見つめる。

そこに映るのは可愛らしい、まるで人形のような人間の女の子の顔であった。パツと見は人間と大差ない自分も、夜になれば血を啜る恐ろしい怪物になる。

「でも……。私は望んで吸血鬼になったワケじゃない……。ッ！」

少女は怒りに任せて腕を水面へと振り下ろすと、バシャンという水しぶきが盛大に上がる。少女の顔はその衝撃で出来た波紋と共に歪んで消えた。

「……ッ！」

その時に傷口に水が被ったのか、少女は激痛に顔を歪め、その可愛らしい瞳をウルウルと潤ませて唇を噛んだ。

傷の治りが遅い……。恐らく聖水を付けた弓矢を受けたからであろう。その証拠に背中に受けた傷は完治していた。

しかし、そうなるとあまり遠くへはいけない。それにもうじき夜が明ける。真祖とはいえ吸血鬼になったばかりなのだ。日の光に浴びたら流石に灰となることはないだろうが、皮膚全体に大火傷を負うことになるのは必須であろう。

だが近くには追っ手がいるし、早く逃げなきゃ自分の命はない。

少女は自分の身体を覆う大きな木の葉っぱを探し出した。数分後、無事に自分の身体をすっぽりと覆えそうな葉を見つけ出し、それを身体に巻いて少女はヨチヨチとゆっくりと前に向かって歩き出した。

しかし、天は少女に味方しなかったようだ。

「いたぞ！！ あそこだ！」

「追え、追うんだ！！ 今度こそ息の根を止めるんだッ！」

追撃者たちは己の使い魔たちの力を用いて少女の姿を見つけ出し、再び散々に攻撃を浴びせ始めた。

「ッ！」

その攻撃に気づいた少女はどうかこうにか攻撃を避けるが、それでも少しはその身に攻撃を浴び、声にならない悲鳴を上げる。

ドウッ！ と少女は足が纏れたのか地面へと倒れ、その回りを追撃者たちが取り囲む。痛みに潤んだ瞳で少女はキッと追撃者たちを睨み付ける。

そこにいたのは怖い顔をした数人の大男たちであった。皆手にはごつい獲物を持ち、それを迷うことない動作で少女に向けていた。

「フン、手こずらせやがって……。しかし、年貢の納め時だぞ。この化けものめ!!」

「あうっ!!」

ドカツと少女の細い脇腹に男の強い蹴りが浴びせられ、少女はあまりの痛さに息を呑む。

それを合図に少女の身体に容赦なく拳や蹴りが浴びせられた。

「い、いたい、いたいよ! 乱暴なことはしないでえ!!」

「うるせえ!! 化け物の癖になに命乞いしてやがる!!」

「そうだ! この化け物め!!」

浴びせられる容赦ない暴言と暴力。

少女は瞳をギュツと力強く瞳を閉じた。早くこの暴虐の時間が終わるのを信じながら……。

しかし、少女の願いとは裏腹に、一人の大男の手によって少女の身体は宙に持ち上げられた。

うつすらと目を開くと、眼前に映ったのは残虐な笑みを浮かべる男の顔であった。ついで視線を足下に向けると、暗闇に満ちた奈落の底が広がっていた。

どうやら知らぬ間に自分は崖のすぐ近くに逃げていたようだ。それで男たちは魔法やら矢を放つのが億劫になったのであるう。手っ取り早い方法としてこの少女を崖下に落とすつもりなのだ。

その証拠に簡単に這い上がれないように、少女の細い足首に鉄球の付いた足枷を填めたのだから。

「な、何するの………。やめて、やめてよ。私、まだ死にたくないよ………」

少女は怯える子兎のような瞳でそう男たちに訴えるが、男たちは無情にも少女の腕を掴んでいた手を離れた。

「あばよ、化け物」

フワリと自分の身体が宙に浮くを感じ、そしてすぐに身体が地面へと引っ張られるのを感じた。

男たちの醜悪な顔が上に上がるのとは反比例に、自分の身体はどんどん暗闇の中へと落ちていく。

少女はムクムクと湧き起こる死の恐怖に絶望しながら、瞋に特大の涙の粒を浮かばせた。

（私が………、私が何を言ったって言うの？ 私は何も悪くないのに！！）

生きたい！ 生きたい！ まだ、死にたくない！！



少女の願いが届いたのか、少女の身体が淡い光に包まれ始めた。  
すると少女の身体は光の粒になって、この場から跡形もなく消えたのであった。

さて場所もかわって、江戸の歌舞伎町の一角にある万事屋銀ちゃんに話は移る。

天人が地球へとやって来てから、古き良き地球の文化はガラリと変わった。

新たに得る物の他に失われた物も多くあった。

その一つに挙げられるのは侍であった。

天人を排する為に人間が起こした攘夷戦争であったが、その天人に完封なきまでにやられた侍は日本中から姿を消した。廃刀令と共に……。

しかし、その世の中に一人だけ侍魂を持つ男がいた。

その男の名は坂田銀時。

スナックお登勢の二階部分に万事屋銀ちゃんを営み生計を立てている。

普段はちゃらんぽらんな性格の持ち主であるが、いざという時にはやる気を出す男である。

その万事屋には彼の人柄を慕って、二人の人物が従業員として働いていた。

一人目は志村新八。眼鏡をかけた、何の特徴もないオタクである。

廃道場を建て直すために必死に働く姉を補佐するために万事屋へと入ったはいいものの、仕事がなく未だ給料を貰っていないので、結局姉に苦労させている駄眼鏡である。

もう二人目は神楽。宇宙最強の先頭民族『夜兎族』の少女であり、大食らいかつ馬鹿力を誇る少女である。日差しに弱いためにいつも傘を持っている。

ヒロインであるのにも関わらず毒舌は言っわ、ゲロは吐くわ、史上最低のヒロインとして知られている。

その三人を仲間に加え、万事屋銀ちゃんは今日も江戸を駆ける……。

「って、何だよこの前書き。ぶっちゃけこんなの必要なくね？」

「そうアル！ 作者の駄文を見るくらいなら、とつとと本文を始めたほうがいいアル」

「まあまあ、そう言わないで二人とも。簡単に紹介した方がいいですよ？」

「つつても、これただの悪口じゃねえか。もはや自己紹介というより、セクシヨアルハラスメントじゃねえ？ こんなバツゲームじ

やねえか」

「そうアル。初っぱなからこんなに貶されるなんて、いたいけな少女の心は深く傷ついたネ」

「いいじゃないですか！！ 僕なんてたった二行しかないんだぞ！！ つか、駄眼鏡って何だよ！！ 全国の眼鏡の人に謝れ！」

と、いつものようにギャーギャーとうるさく叫ぶ万事屋一行。

そんな三人の前に珍しく客が訪れた。

客の名はめんどいから客1号でいいや。

新八は銀時たちと騒ぐのは止め、客1号を居間へと通すとソファに腰掛けるように薦めた。それからお茶を入れにキッチンへと向かう。

「んで、この万事屋銀ちゃんに何の用なんだ？」

銀時が主らしく椅子に深く腰掛けドカツと足を組んで机に乗せた体制のまま、そう客に問うと、

「はい……………、実は……………」

お客は静かに依頼内容を口にした。

何でも自分の屋敷で妙な気配がするのだという。それも一度や二度でもなく、一日中気配を感じるらしく、夜もおちおち眠れないことらしく。

「ふうーん、気配ねえ……。なんか動物とかそんなのじゃねえの？」

「いえ、動物とかの気配じゃありませんでした。お願いです！！この気配の原因を探ってはくれませんか？ 勿論お礼はきちんとさせていただきますので……」

銀時は最初のうちは渋っていたが、お礼と聞くと目の色を変えてその依頼を飲んだ。勿論、目の色を変えたのは銀時だけではない。

給料を貰えていない神楽も新八も同様であつた。

三人は互いの顔を見合つと、ニタリとした意地の悪い笑みを浮かべ、それぞれの獲物を手に取る。

「さあ、テメエら！！ 久しぶりの仕事だ！！ 気合い入れていけよ！！」

「はい！ 久しぶりの給金のためにも頑張ります！」

「オウヨ！！ 酢昆布3箱分買えるように頑張るヨ！！」

銀時たちは元気よく叫ぶと、依頼現場へと駆け出していったのであつた。

## 第1訓 タンスの向こうにあったのはナル アじゃなくて、金髪幼女ッ!?

銀時たちは依頼主の家に貰った合鍵で入ると、まず家を見て最初に抱いた感想はというと。

「でっけえ!! 何だこの家の広さは!? 嫌みか? 金がない俺に対する嫌みなのか?」

「すっごいアル!! 銀ちゃんのあのボロ家が十軒くらい入る大きさアル!! ワタシ一度でいいからこんな大きな家に住んで、日がな一日ゴロゴロしながら酢昆布嚙りたいヨ」

「いや、それは今とあんまり変わらないんじゃない?」

と、三者三様の感想を述べる。

しかし、そんな感想も出てしまうほどにこの家の大きさは半端なかった。歌舞伎町にしては大きすぎる屋敷を目の前にし、銀時はギリギリと歯ぎしりしていた。

いや、この家とあの家を比べても逆に虚しくなるだけだろうに……頭に血が上っている銀時はそのような簡単なことにも気づかない。

そんな銀時を新八は軽く怒鳴りつけて正気に戻すと、家の柱に鼻糞を擦りつけている神楽と未だブツブツと呟いている銀時を促しつつ家の中へと足を踏み入れた。

客一号から聞いた情報によれば、気配を感じるのは自分の寝所らしい。あとの部屋は気配を感じないのだが、自分の寝所に入ったら何か鋭い、まるで肌を刺すかのような気配を感じるらしいのだ。

「……仕事をしやすいようにって給仕の人たちとかを外に出しているみたいですけど。こう家が広いとかえって落ち着かないというか」

新八はキョロキョロと中を見渡しながら呟く。

銀時もありこういう広い屋敷とは縁がないか、妙にソワソワと落ち着かない様子であった。

「ああ、なんつーか落ち着かねえーな。こう……、なんつーの？ 普段貧乏暮らしたとこういう金持ちの家に来ると妙にテンションが上がるつーか。はっ、これはまさか修学旅行前の夜なかなか寝れないという心境に似ている気がするのは俺だけ？ ねえ？ 俺だけかなぱっつあん？」

「知りませんよ。って、今はそんな下らないことを言ってる場合……あれ？ 銀さん、神楽ちゃんは？」

新八が銀時の問いに素っ気なく答えるも、さっきまで横にいた神楽の姿が見えないことに気がつき、新八は銀時に尋ねる。

しかし、銀時はしらねえよと首を振って答える。

どこに行ったのだろうか？ と二人頭を捻って考えていると、

「キャッホーイ！！ 凄いアル！！」

と、二階からえらくハイテンションな神楽の声が響いてきた。

その声を頼りに広い廊下を渡り二階へ続く階段を見つけると、二段飛ばしで階段を駆け上がっていく。どうやら神楽がいるのは一番奥の部屋のもようであった。

新八はスパアンと勢いよく襖を開け、ズンズンと足音荒く中へと入る銀時と新八。

部屋の中へと入った新八と銀時が見たものかというと……。

「か、神楽ちゃん………。何してるの？」

「ん？ ああ、新八に銀ちゃん。どーしたアルか？」

新八の問いかけに神楽はキョトンとした面持ちで返事した。

新八と銀時は唖然とした面持ちで神楽を見つめていた。なんと神楽は今まで来たことのない様な豪華なドレスに身を包み、手にはえらいリアルな着せ替え人形を手にしていたのだから。

「ちょ、神楽ちゃん。その服どうしたの！？」

「これアルか？ そこら辺に落ちていたアル」

「んなモンが落ちてるわけねえだろ！！ つーか、テメエその服ブカブカじゃねえか！ 明らかに無理に着たよね、それッ？」

銀時が神樂の着込むドレスを見て指さしながらつつこんだ。確かに神樂にはだいぶんサイズが大きいようで、肩からずり落ちていたし、袖もブカブカでまるでキョンシーのようであった。

「んだよー。せっかく着てやったのに。なんか興ざめヨ。もうこんな脱ぐアル」

神樂はつまらなそうに唇を尖らすと、着ていたドレスを脱いで床に放った。新八は慌てて皺になる前にドレスを拾って、手近なハンガーに掛けて壁のフックに吊した。

「神樂ちゃん、あんまりへんなことしないでよ。せっかくの依頼がパーになっちゃうじゃない」

「はいはい、分かりましたー」

と、生返事で答える神樂。そんな神樂に新八はピキツと眉間に青筋をたてて怒鳴ろうとするが、ふと神樂の持っている人形に気づき、それを取り上げようとして手を伸ばす。

「神樂ちゃん、まだ人形なんか持つてるの？ ダメだよ、勝手に余所様の物をいじったら」

「なんだよおー、新八はブツブツ五月蠅いあるなあ。お前はワタシの親アルか？ そんなだから女にもてないんだヨ」

「何だとこのクソアマー！！ テメエーやっぱ星に帰れえー！！」

と、新八と神樂はいつものように互いを罵りあいながら取っ組み



合いを始めてしまう。神楽は手に持った人形を部屋の隅で他人事のように鼻をほじっていた銀時へと投げつけてしまい、それが見事銀時の頭にクリーンヒットしてしまう。

「……………ッ！　　ったく、喧嘩してるときに物投げるなんてよー。あいつら動物園にいる客にウンコ投げるゴリラと一緒にじゃねえか」

銀時は人形が当たったところをさすりながら、足下で俯せに転がった人形を拾い上げる。それをひっくり返して見た瞬間、銀時は油の切れたロボットのようにその動きを止めた。

そんな銀時の異変に気づいたのか、新八と神楽は争うのを止めて銀時の方へと歩み寄った。

「銀さん、どうしたんですか？」

「銀ちゃん、人形に何か付いてたアルか？」

銀時は顔を俯かせたまま、恐る恐るといった風に口を開いた。

「……………神楽。お前、この人形こんなのが付いてたぞ」

銀時はズズイと神楽に手に持った人形を見せつける。神楽と新八はよく見ようと人形に顔を近づけさせる。たちまち二人の顔は血の気を失った。

人形の服には赤い文字で『　子死ねえええ！！！』と書かれており、人形の顔は傷だらけで、元の愛らしい顔など見る影もなかった。

「か、かか神楽ちゃん！！ この人形最初からこんなだったの！？」

「知らないヨ！！ 人形が落ちてたから拾っただけアル！！ こんな不気味なん知っていたら拾うはずないネ！！」

「いんや！！ テメエの事だからよく見ないで拾ったんだろ！？ だからあれほど脇が酸っぱくなるほどいつてんじゃねえーか！！ 落ちてる物を拾うなって！！ ああー、もう帰るぞ！ これ以上ここにいたらろくなことになるねえーよ」

と、銀時は手にした人形を放り投げ、玄関へと向かおうとするのを、新八は腰に抱きついて止めようと試みた。

「ちょー！！ 銀さん仕事どうするんですか！？ 久しぶりの仕事ですよ！！ もうお金がないんですから仕事を選べないんですよ、僕たちは」

「んなもん知るかあ！！ 金より命じゃあ！！ こんな呪われた屋敷で仕事が出るほど、俺は神経図太くねえーんだよ！！」

帰る、帰らない、帰る、帰らないと言い合っていると、何やら大きな物音が隣の部屋から聞こえてきてたのと同時に、身体を差すような視線が三人の五感にひしひしと伝わった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

しばらくの間を置いた後、銀時が部屋の隅に置いてあったゴミバケツに身体を突っ込もうとしていた。それを見た新八が銀時の腕を

掴んで止める。

「ちょー！！ 銀さん、どこにいくとしてるんですかー！！」

「ほ、ほら。アレだよアレ！！ ドラ もんのいる世界に通じているんだよー！！」

「んな訳あるかあ！！ いい加減現実逃避するのを止めてくださいよー！！」

ギヤーギヤーと言い合う二人を尻目に、神楽は気配のする部屋へと向かっていた。

「全く二人はお子様ネ。ここは一つ歌舞伎町の女王である神楽様が一肌脱いでやるアル」

神楽は抜き足差し足忍び足で部屋の中へと足を踏み入れる。

襖を跳び蹴りで蹴り破り、まるでアクションスターのようにゴロゴロと転がりながら、部屋の中へと入る。それからカンフーポーズを取り、キョロキョロと視線だけを動かしながら部屋の様子を窺う。

えらく年の割には少女趣味な外装なだけで、とくに変わった様子ではなかったものの、神楽は慎重に辺りを探りながら夜兎のカンで気配がする方へと向かう。

その場所とは……………、そう洋箏筥が置いてある部屋の隅であつた。

「……………ゴクリ」

神樂は唾を嚥下しながら、震える手でダンスの取っ手へと手を伸ばす。グツと取っ手を掴むと勢いよく引っ張った。

すると、ダンスの中から何かが神樂の方へと落ちてきた。

「うおっと！！ 何アルか？」

神樂はダンスの戸を閉めると、自分の方へと倒れ込んだ何かへと視線を下ろすと、何とそこにいたのは血まみれの自分に似た年の金髪少女であった。

それを見た神樂はパアアアと満面の笑みを浮かべたのであった。

第1訓 タンスの向こうにあったのはナル アじゃなくて、金髪幼女ッ!?(後

今日はここまでです。次は二話更新しようと思っています。  
エヴァンジェリンを早く動かしたいです(ハ―ハ)

## 第1・5訓 喉の渴きと傷だらけの身体で

(・・・・・・・・ここはどこだろう?)

少女は長い眠りから覚めたときのような、妙にぼんやりとした心地のままふとそんなことを思った。いやに身体が重く、ズキズキとした鈍痛が身体内を駆けめぐる。

辺りは暗くて狭く苦しく、息が詰まりそうだった。どことなくカビ臭く吸血鬼である少女には耐え難い臭いであった。一刻も早くここから出ようと藻掻くが、その度に身体の節々が痛む。

「・・・・・・・・ツ!!」

少女はその痛みに息を殺して喘ぐ。

長距離を走り続けた時のような浅い呼吸を何度も何度も繰り返し、襲いかかる鈍痛から逃れようとする。だが、あんまり効果はないようだ。

そう言えば・・・・・・・・、と少女は痛みに耐える中でふと呟いた。

(・・・・・・・・崖から落ちたはずなのに、どうして大した怪我もなしにいられるんだろう? 私は吸血鬼だから死ぬことはないだろうけど、肋骨や足の骨は折る大怪我は免れないはず・・・・・・・・。なのに何故男たちに受けた傷だけなのかな?)

そう。自分は崖から錘を付けられて落とされたのだ。なのに大した怪我もなしにこうして存在している。それにここは崖の下ではな

さそうだった。

奈落の底に横たわっているならば、天井から一筋の光が見えるはずなのに。ここは光も何も入らない。まるで監獄のような場所であった。

（とにかく早く逃げなきゃ．．．．．。もうすぐ夜が明けてしま  
う）

それに．．．．．、喉も渴いてきた。カラカラになった喉が血を求める。己の喉の渴きを潤わすために、ただただ貪欲に人の生き血を求めていた。

（血が．．．．．、血が欲しい。あ、ああ、血を、血を飲ませて）

激しい吸血衝動が脳内を支配し、少女はガリガリと喉を爪で掻きむしる。皮がむけてうつすらと血が滲んでいるが、今の少女には痛みという感覚はない。あるのはただ血を欲するという野生じみた本能だけであった。

青色の瞳も今は血のように赤く染まり、瞳孔も猫のように細くなっていた。少しだけ開いた口の隙間から長く伸びた犬歯がチラリと覗いていた。

「ふっ、ああ、う！　ああ．．．．．、うう！」

思うように身体が動かない。その原因は足に填められたこの鉄球つきの足枷であろう。それに気づいた少女は渾身の力を込めて外そうとする。

だが、鉄球に触った瞬間に己の手の平に火鉢を押し当てたような激痛が走るのを感じ、慌てて鉄球から手を離す。どうやら鉄球の表面に聖水を塗り込んでいるようだ。

その痛みで少しだけ正気に戻り、少女は苦々しい表情を浮かべ、グツと唇を噛み締める。ほんの少しだけ口の中に血が広がったが、自分の血なので喉の渴きはさほど満たされない。だけど何もなければマシなので、少女は己の血を少しずつ飲む。

もどかしい。こんなことでしか自分を保つことが出来ないなんて・・・。

最初は嫌で嫌で仕方がなかった血の味も、今は人間だった頃によく飲んでいたミルクティーより、甘く感じた。血の味は鮮明に分かるのに、他の食べ物あまり味を感じない。

吸血鬼にとって血を飲む以外の食餌行為は、ほとんど嗜好として行われる。勿論、自分もそうだ。人間だった頃に食べていた食べ物や飲み物を好んで食べているが、吸血鬼になってからは一度も美味しいと感じたことはない。

それでも自分は人間だった時のことを忘れなくなつて、こういった行為を無為に繰り返しているが、あんまり効果はなかった。

日が経つにつれ、吸血鬼の衝動が強まる一方であった。

今の自分に出来ることは、そんな吸血鬼の衝動に飲まれないように堪え忍ぶことであった。

少女は膝を抱え込み、ただ一点だけを見据えていた。時間も分か



らない暗闇の中で、少女はただずっと孤独と痛みに耐えていた。

あれから何日が過ぎたのだろうか………？

この暗闇の中では時間も何も分からなかった。外に出て新鮮な空気を吸いたかったが、衰弱したこの身体では不可能に近かった。それに吸血鬼である自分にとって暗闇は心地よかった。

それにここにいれば人間から命も狙われない。わずか数？ばかりの空間が安住の地となっていた。

だが、たまに人の気配がこの壁の向こうから漂ってきた。嗅覚が敏感な自分には例え壁越しでも探知することが出来た。

その度に少女は吸血鬼だけが発することの出来る気を放ち、人間を自分の周りから遠ざけた。

それのおかげで自分の居場所をばれずに済み、ホッと胸をなで下ろしたのも束の間、数人の人間の気配を感じた。

それもドンドンと近づいてくる。少女は身体にジITTERとした冷や汗を流した。

どうしよう………！！ もし私の居場所がばれたら！！

今度こそ息の根を止められるだろう。だとしたら追い出すしかない………。

再び気を発すると、一瞬の間の後、人間たちが騒ぐのを感じた。

（？ 妙に騒ぐ人間たちね．．．．．話す内容はよく分からないけど．．．．．）

身体を縮こまらせて、ジッと人間が立ち去るのを待つが、その願いは通らなかったようだ。

自分のすぐ近くで一人の人間の気配が感じられ、私はビクツと体を大きく震わせた。

瞳をギュツと閉じて息を殺して待つ。

すると、バアンとした大きな音が響いたのと同時に、自分の視界が真っ白な光に埋め尽くされた。あまりの眩しさに少し呻いて、前のめりに倒れると誰かに支えられるのを感じた。

恐る恐る瞳を開いてみると、そこにいたのは自分と似た年の女の子の姿がそこにあった。

第1・5訓 喉の渴きと傷だらけの身体で（後書き）

書きました。吸血鬼少女っていいすよね……。。

## 第2訓 金髪幼女は飼っちゃいけませんパラノイドッ！？

神楽は自分の手中にいる金髪美少女を見つめた後、目を大きく見開きキラキラと輝かせる。その様子ときたら真新しいオモチャを手に入れた時の子供のものであった。

「凄いネ！！ リアル人形アル！！ ワタシテレビでしか見たことないアル！！」

と、神楽はウキウキとした様子で脱力した少女を片手で持ち上げて小躍りする。そのまま隣の部屋で騒いでいる銀時たちの元へ小躍りしたまま向かう。

「銀ちゃん！！ 新八！！ 凄いの見つけたネ！！」

パンツ！ と片足で器用に襦を蹴り開けて入ると、そこには互いの服の襟首やらを引っ掛けて言い合う銀時たちがいた。

銀時と新八は神楽の声と襦の開く音に気づき、そっちの方へと視線を向ける。

「んだよ、神楽。 テメエー、今までどこに……………」

「？ どうしたんですか、銀さん。 急にかたまちゃって？ あっ！ 神楽ちゃん、隣の部屋でなにして……………」

二人とも神楽へと視線を向けた瞬間ピシリと音を立てて固まった。額からはダラダラと多量の汗が流れ落ち、顔色も見る見るうちに蒼白になっていく。

まあ、それもそのはず。何せ神楽ときたら、ぐったりとした金髪の美少女を片手で持ち上げているのだから。これを驚くな、と言う方が無理があるだろう。

「どうしたネ？ 二人とも。まるで死にかけの魚みたいな顔アル。まあ、銀ちゃんは元からそんな顔してアルけどな」

「ああ！？ 何だと！！ って、俺の顔のことはどーでもいいんだよ！！ あれ？ 本当は良くないけどね！？ ここは良しと言つことにしよう！！」

「って！！ そんな下らないこと言っている場合じゃないでしょう、銀さん！！ っていうか、神楽ちゃん、その女の子で手に入れたの？」

新八はいきり立つ銀時をどうどうと押さえると、未だ少女を大事そう？ に持つ神楽へと尋ねる。

すると神楽はフン！！ と勢いよく鼻息を出すと、ない胸を目一杯反らして、

「フン、聞いて驚くなヨ、新八。これは隣の部屋のタンスの中に入っていたアル！！ ナル アじゃなくて、リアル人形が入っていたアル！！」

神楽がそう言い放った瞬間、三人の間に妙な空気が漂うが、それは新八の放ったつつこみの声で掻き消えた。

「んな訳あるかああああ！！ 嘘つくならもう少しマシな嘘つ

けやああああ！！ 何で普通の家のダンスに金髪少女が入ってんだよ！！ 幼稚園児でももう少しまともな嘘つくわ！！」

「んだよおー。新八は本当に五月蠅いアル。つかこの神楽様が嘘つくはずないネ！！ マジにダンスの中に入っていたアルヨ！！」

と、新八のつつこみにムツと眉根を寄せると、銀時たちに見せつけるようにズズイと手に持った金髪少女を押しつける。

銀時と新八はウツと顔を歪めたが、よくよく見ると微かにだが少女の胸は動いており、これは死体でなく生きている人間だということが分かった。

「・・・・・・生きてますね、これは。にしても何で女の子がこの家の、しかもダンスの中なんかに・・・・・・？」

新八が眼鏡をクイクイと上げながら、まじまじと少女を観察しながらそう呟く。

「さあな、金持ちのすることはてんで理解できねえしよ。俺ら庶民にはよくわからねえもんなのさ」

と、銀時は神楽の持つ少女が生きていることに安堵したのか、いつもの様子で鼻をほじりながら淡々と相づちを打つ。

すると今まで黙っていた神楽がハッと何かに気づいたようで、

「この子を誘拐して拉致監禁して、身代金ガツポガツポ手に入れる気アルヨ！！」

グツと拳を握りしめて力説した。

「!？ ま、まさか……、それは考え過ぎじゃないかな、神楽ちゃん。もしそうだとしたら、なんでわざわざ僕たちに依頼を申し込みに？ そんなばれるような、危険なことを犯す必要があるんですか」

「それはあれネ。ワタシたちに犯罪の片棒を担がせる気アルよ」

ゴクリと唾を飲み込む銀時たち万事屋一行。

もしそうだとするならば、この状況は非常にまずいんじゃないか？ もしこれを帰ってきた使用人にでも見られたら、間違いなく銀時たちが罪を被るハメになるであろう。

そうなったら流石にまずい。この若さで犯罪者になる気は毛頭ないのだから。

そこまで考えた三人の取った行動は早かった。

無言で合図を交わすと、三人は証拠隠滅を計り始めた。まず神楽が手近の布を手に取り、それで金髪少女をグルグル巻きにし、その間に新八が微妙に散らかった部屋を片付け、そして最後に銀時が簀巻きの少女を小脇に抱える。

それから素早く二階の窓から飛び降り、脇目もふらずに駆け出したのであった。

1時間後

。

通行人にもばれずに無事万事屋へと逃げ帰れた銀時たちは、安堵の溜息を吐く。

全力疾走で走ったので、三人の吐く息はとても荒かった。

ハアハアと浅い呼吸を繰り返していると、ソファアの上に置いてあった簀巻きがモゾリと蠢き、粗めの紐で解けないように括っていたのが、その動きで解けてしまいハラリと布が捲れ、金髪美少女が姿を現した。

どうにか息が整った銀時が少女へと視線を向けると、ギョツと目をひんむく。

なんと少女の足首には鎖つきの鉄球がはめられており、それを自分がここまで運んできたと思うとゾツとした。

神楽が実に軽そうに持っていたのと、犯罪の片棒という粹に囚われてそんな些細なことなど眼中に入らなかったのだ。

神楽は夜兎族だ。あいつが怪力娘なのを今更思い出し、銀時はガシガシと頭を掻きむしった。

にしても俺・・・・・・・・、ここまで持ってこれる力があつたんだな。人間必死なれば何でも出来るってか。

あーあ、こんな俺を表彰したいぜ、全くよお。

そんな風に軽いマリツジブルーに浸っている銀時に、



「銀さん、なにウンウン唸ってるんですか？」

新八がジト目でそう尋ねると、銀時は慌てた風に手を振って答えた。

「うえ！？ いや、何でもねえーよ！？ ちょっと頭の中で見知らぬおっさんが俺にあることないこと吹き込んでいただけさ」

「はあー、そうなんですか？ まあ、どうせ嘘だろうけど、今は銀さんの冗談に付き合っている暇はないんで」

と、それだけ言うと新八はクルリと少女の方へと向き直る。あの神楽でさえ銀時に毒舌も吐かずに、金髪少女に夢中であつた。

なんだか構って貰えないなら貰えないで、非常に虚しくなった銀時であつたが、自分も少女のことが少しばかり気になるので、新八の隣に胡座を掻いて座る。

「んで、連れて帰ってきたもののどーするよ、コレ」

「え？ さあ、どーしましょうか？」

「フン、そんなもの決まっているアル！！」

神楽は待つてましたとばかりに腕を組んで立ち上がる。

「……で飼うアルヨ……」

と、ビシッと少女に指を突き刺しながら高らかに宣言したのであ



## 第2訓 金髪少女は飼っちゃいけませんパラノイドッ!? (後書き)

今日はここまで。次からエヴァンジェリンと銀時たちが絡み始めます。

そして、皆さんお待ちかねの吸血シーン(^^)ノノがありますので、楽しみにしてください。それではまた明日に。

### 第3訓 吸血鬼って、ぶっちゃけ蚊じゃね？

エヴァサイド

(う．．．．．、何だろう。何だか騒がしいな．．．．．)

私はぼんやりとする中で周りが五月蠅いのに気づいた。長らく血を吸っていないからか、身体が言うことを聞かず、私はその声の正体を確かめる気力も残ってはいなかった。

やはり自分の血では大した回復力はないのだろう。せいぜい死ぬようにするだけだろう。

まっ、言うならば応急措置といったところだろうか。

そう言えば．．．．．、私を助けてくれた？ 少女はどこに行ったのであろうか？ 私を見ても珍しく怖がらず、嬉しそうに微笑んでくれた少女。

一瞬しか見えなかったが、私にとって彼女は吸血鬼になってから、初めて見た人の笑顔であった。

それはとても暖かく、心地の良いものであった。

(それにしても．．．．．、ここはどこだろう？ あそこほどじゃないけど、とても居心地がいい場所．．．．．。冷たく暗い闇の中でない、暖かく日溜まりのような場所)

それは私が長く渴望していたものだ。吸血鬼になってから私は平

穏で暖かな、言うならば安住の場所を探し求めて各地を転々と旅をしていた。

だが吸血鬼の私はどこに行っても、人間に追われ、罵られ、殺されかける始末。

そんな私が唯一安心できる場所は人気の少ない森の中や洞窟であった。

闇と孤独が私の友と思っていた私にとって、久しぶりに感じる温もりに私は涙が零れそうになったが、それを懸命に堪えた。

だが……、と私は泣くのを堪えている間に、胸中にふと不安が渦巻くのを感じた。

もしかして少女は私が吸血鬼だということを知らないのかもしれない。

だとすれば、私が吸血鬼であるということを知れば、今までで出会った人間のように豹変して私を殺そうと襲いかかってくるかもしれない。

そう思うと、私は怖くて怖くて身体の震えが止まらなくなった。

（いやだ！ 死にたくない！！）

そう思えば思うほど、身体の震えは止まらない。

逃げようと思うが、消耗しきった身体にはもうそのような気力も体力もない。

私は怖くなってギョツと目を瞑っていると、不意にあの少女の叫び声が部屋中に響き渡った。

「この子はここで飼うアル!!」

私は何を言っているのかはよく分からなかったが、そのあまりの声の大きさに驚いて目を開けたのであった。

## 万事屋サイド

銀時と新八はとんでも発言をかました神楽を信じられないという風に見つめる。

そんな神楽の発言に真っ先に反応したのは勿論、我らが銀魂のツッコミキャラである新八であった。

「ちよっ!! 神楽ちゃん、女の子を飼うなんて何戯けたこと言ってますか!? 犬や猫じゃないんだから、そんな気軽に飼うだの言っちゃいけないでしょ!! それに家にこれ以上人を養う余裕はありませんよ。さっきの依頼も断って依頼金もパーになっちゃったんですから」

「んだよあー。けちけちすんなアル。それにいつからテメエがいつ万事屋銀ちゃんのオーナー気取りになっただんだヨ!! テメエは丁

稚奉公だろーが。このワタシに意見するなんて一億光年早いんだヨ」

「んだとゴラー！！ テメエーだつて丁稚奉公2号だろーが！！  
つか僕がちゃんとしてなきゃこの店はとうの昔につぶれてんだよ！  
」

「あー、はいはい。そうですかー。ねえ、銀ちゃん。飼ってもいい  
アルか？ ねえねえ、ねえねえねえねえねえ」

と、神楽は新八を華麗にスルーし、いつもの椅子に腰掛けながら  
耳を穿っている銀時をお願いし始める。

そんな神楽にますます新八はウガーツとキレる。

「なに人を無視してんだよッ！！ っていうか、神楽ちゃん。定春  
の世話もろくに出来てないのに、女の子の世話なんて出来るはずな  
いでしょ！！」

ビシッ！ と部屋の隅を指さす。

そこには白い大きな犬が気持ちよさそうにイビキをかきながら寝  
ていた。

名は定春といい、神楽が気に入ってこの万事屋で飼うことになっ  
た巨大犬である。

その正体は天人が来る前、つまりターミナルが建つ前の天龍門を  
守ってきた犬神の仔である。馬鹿力で大飯ぐらいで、神楽が獣化し  
たような存在であった。

最初は「ワタシが面倒見るアル」と言っていた神楽であつたが、今や定春の世話是新八や銀時の係になっていた。そんな神楽が人間の、しかもこの様な弱い少女の世話など出来るはずもない。

そんな定春は神楽達の話など興味がないのか、「フワアア」と大あくびしていた。

しかし、欠伸をした後に定春はピクリと耳を蠢かすと、ムクリと起き上がり、少女の横たわっている方へと歩み寄る。それから少女の顔をペロペロと舐め回す。

「？ 定春どうしたアルか？ これは餌じゃないアルヨ。囓るのならこいつにしとくアル」

グイツと新八の襟首を引っ掴み、定春の前へとズズイと差し出すが、定春は興味がないようで新八になど目もくれない。

噛まれないで安堵したが、それはそれで寂しいと思う新八だった。

不意に視線を下に下ろした新八は少女が目を覚ましており、妙に強張った表情でプルプルと小刻みに震えていた。

「ぎ、銀さん！！ どうやら目を覚ましたようですよ！！ 神楽ちゃん、定春に退くように指示して。彼女定春が怖いみたいだから」

「おう！！ 合点承知の助ネ！！ 定春、そこから退くヨロシ」

神楽が退くよう指示すると、定春は大人しく指示に従う。定春が退いた瞬間、少女の身体から力が抜けるのが分かった。



「そいつ、目え覚ましたのか？」

銀時はフツとほじった耳クソを息を吹きかけて飛ばすと、椅子から降りてこちらの方へと歩み寄ってきた。

それからジューツと眼下に横たわる少女の顔をいつもの覇気のない瞳で見つめる。

人形のように整った顔に、明るく輝く碧眼、足首まで伸びる艶やかなウェーブがかった金髪、どこをどう見ても日本人には見えなかった。

それに先程から気になっていたのは、彼女の服装等にあった。

半袖タイプの露出が激しい黒のキャミソール……、まあ、これはいいとして。問題なのは身体に走る無数の傷跡と、足首にはめられている鉄球付きの足枷であった。

年の功は神楽と同じくらいな少女なのに、どうしてこの様な仕打ちを？

まあ、思い当たるのはやはり天人関連だろうか？

美少女を攫って天人のお偉いさんに、愛玩用の奴隷として売り渡そうとか、そんなところだろう。

現にあったもんな。ほら、新八の姉貴が借金形の形に売られそうになったの。

まあ、あいつの場合は見かけはいいけど、中身はゴリラだもんな。

ぶつちゃけあれは詐欺だろう。

あんなのに引つ掛かったら、人生終わりだ。バットエンドだよ、このヤロー。

そこまで黙考した銀時はフムと頷き、

「神楽、新八、とりあえず医者呼べ医者。呼べなかったら薬屋行って傷薬や包帯買ってこい」

と指示を出すと、神楽は瞳を輝かせた。

「じゃあ銀ちゃん、この子を飼っていいアルか!？」

「馬鹿ヤロー。なんで治療する」飼ってもいいになつてんだよ。このままじゃ目覚めが悪いだろうが。その話はいいつの手当がすんでからだ」

神楽と新八は銀時から金を受け取ると、矢継ぎ早に部屋を飛び出し、一目散に薬屋か病院へと駆け出した。

その間に銀時はこの少女へと話しかけた。

「よお、目が覚めたんだってな」

向かいのソファーへと腰を下ろし、足を組みながら声をかけるが、少女はピクリと身体を震わすだけで、一向に口を開く気配はない。

しかし、そんなことを気にする風もなく、銀時は一人で話を進め

る。

「んでよ、腹減ってねえか？ あんなとこに閉じこめられていたもんな、ろくなモン食ってねえんじゃねえか？ 今なら俺の特製宇治金時丼食わせてやるぞ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

少女は視線だけ動かして銀時を見つめる。

すると、少女のお腹が可愛い音を立てて鳴った。

その音を聞いた銀時はフツと微笑んだ。その微笑みを見た少女は顔を赤く染めた。

それからその笑顔のまま、スツと少女の前にどんぶりを出した。

そのどんぶりを見た少女はギョツと顔を引きつらせた。

それもその筈。なにせどんぶりの中にあるのはご飯にこんもりと盛られた小豆なのだから。

小豆など知らない少女にとっては『茶色い何か』にしか見えないわけ。

青ざめた表情で銀時を見上げると同時に、手に持ったどんぶりをペイツと払いのけた。

「んなあああ！！ 何すんだ、このガキ！！ 俺の宇治金時丼を！！ しかも今回の小豆は国産だったんだぞ！！」

床に落ちた宇治金時井の残骸を見下ろし、ギャーギャーと喚く銀時。

少女はそのわめき声を聞きムツと顔を膨らませると、ついに我慢が出来なくなつたのか強硬手段に出た。

残つた力を振り絞り、銀時の服の裾を引つ掴むと、銀時を自分の方へと手繰り寄せた。強い力で引つ張られた銀時は身体のバランスを崩し、少女の方へと蹠踉めく。

その隙を狙つて少女は銀時の服をずらし肩を露出させると、鋭く尖つた爪で軽く切り裂いた。

「ぐお!？」

微かに感じた痛みにも声を上げる銀時を尻目に、少女は傷口から流れ出した血を舐め取り始めた。

少女は銀時の血を舐め取つた瞬間、目を大きく見開き、ついには舐め取るのもめんどくさくなつたのか、鋭く伸びた己の牙を突き刺し、チューチューと血を吸い出し始めたのだ。

「ふ、ふぁ・・・・・・・・ん、んう、あ、ふ・・・・・・・・」

ゴクゴク・・・・・・・・、と喉を鳴らして血を飲む少女。

しばらく銀時の血を飲んでた少女であつたが、やがて満足したのか肩から牙を抜き取る。牙から血がツウと垂れたのに気づいた少女はぺロリと舌で舐め取る。

血を吸われた銀時はしばらく放心状態であつた。

もう何が起きたか分からない様子。

それもその筈だ。目の前の女の子が自分の血を吸うなんて、そんなメルヘンな。

「ただいま戻りました。つて、ええええええ！！！！　ちよ、銀さん！！　一体何してるんですか！？」

しかも、運悪く駄眼鏡が戻ってきやがったから大変であつた。

今はとにかく気絶さしてくれ。

銀時はバタリとゼンマイが切れたカラクリの様に、そのままの体制のまま後ろに倒れるのであった。

### 第3訓 吸血鬼って、ぶっちゃけ蚊じゃね？（後書き）

はい、今日はここまで。次から少女の名前が明らかに！ まあ、読者の皆様は知っていると思いますが（汗）。

まあ、何はともあれようやく銀時たちと絡みが出来ました。

#### 第4訓 吸血鬼には、あれでしょ？ 蚊取り線香が有効でしょ？

神楽と新八は床に倒れている銀時と、ソファーの上で唇から血を垂らして恍惚の表情を浮かべている金髪少女を見比べていたが、次の瞬間。

「うあああああ！！ 銀さああああああん！！ ちよつ！  
？ 銀さあああああん！！」

「銀ちゃん！？ どうしたアルか！？ こらあ！！ その雌ガキ  
！！ 銀ちゃんに何したネ！！」

神楽がビシツと音が鳴るほどの強さで少女を指さすと、少女はビクツと体を震わせ、今まで恍惚の表情が消え失せる代わりに恐怖に顔を染め、ブルブルと身体を震わせながら毛布を頭から引つ被る。

しかし、神楽たちの様子が気になるのか毛布の隙間からコソコソとのぞき込んでいた。

神楽たちは床に倒れている銀時を見やり、何やら肩を寄せ合って話し合っていた。

「か、かかか、神楽ちゃん！！ どうしよう！？ こ、この女の子人間じゃないのかな！？」

「はっ！？ もしかして……、またあの蚊の天人なんじゃないアルか？ あの女……」

「ええ！！ あつ、でも確かに……。口から血流していた

し・・・・・・・・・・」

『キツとそうネ！！　またろくでもない男に孕まされたに違いないネ！！』

『それで銀さんの血を？　まあ、確かに銀さんの血は甘いから、蚊にしてみたらご馳走だもんね』

『そうに違いないネ！！　銀さんを助けるためにはあいつを追いつすしかないヨ！！』

神楽と新八はコクリと頷きあうと、決意した表情で金髪少女に向き直った。

少女は殺気漂う二人に恐れを抱いたのか、激しく身体を震わせ、えぐつと恐怖に顔を歪める。

新八は美少女の怯える表情を見て、思わず怯んでしまうが、神楽はズイと少女へとその足を踏み出し、フフフと不敵な笑みを浮かべた。

「フフフフ・・・・・・・・・・。この歌舞伎町女王神楽様を怒らしたら、どないなるか見せたるでえ！！」

ババツと懐から取りだしたのは・・・・・・・・・・、何の変哲のないただの蚊取り線香であった。

少女は何が出るかびびっていたが、神楽が眼前に突き出した物を見て驚きに目を見開けた。緑色のグルグル巻きでさつきちよから煙から出ていた何かに、少女はただただ目を丸くして呆然と見つめた。



「……あれ？ 神楽ちゃん、なんかあんま反応がないですけど？ この蚊取り線香……」

「あれ？ おかしいアルな？ ああ、新八。これ一年前に消費期限過ぎてるアル」

「ちよつとおおおおお！！ 神楽ちゃん、そんなもの使わないで！！ はやくペツてしなさい、ペツて！！」

「グッ！！ ゲホッ、ゴホッ、ゲホ！！ か、神楽ちゃん！！ なんか煙が紫色になってんだけど！！ なんか目に染みるんだけど！！」

新八はゴホゴホと激しく咳き込み、何度も目を擦りながら窓を開けようと窓枠に近寄る。毛布にくるまつていた少女もコホコホと可愛らしく咳き込む。

部屋中に紫色の煙が充満する中、神樂はその怪しい蚊取り線香を少女に突きつける。少女は咳き込みながらも、自分に突きつけられた蚊取り線香を引つ掴み、新八が開けた窓の外へと放り投げる。

「ああ　　！！　何するアル！？　このチビガキ！  
！　ちよつと可愛いからつてちよーしに乗るなヨ！！　次はこれアル！！」

神楽はキーツと癩癧を起こした猿の如く怒り狂い、少女に次の物を突きつけた。

その物とは・・・・・。

蚊退治スプレー「キンモール」であった。

「食らえアルうううう！！」

プシュウウウウウウウ！！

神楽はキンモールを少女の顔面に突きつけると、その煙を至近距離で吹きかけた。少女は再びゴホゴホと激しく咳き込み、えぐえぐと嗚咽を零し始める。

可愛らしい端正な顔を悲痛に歪め嗚咽する姿を見て、意外にドSな一面を持つ神楽は嬉々とした表情で煙を吹き付けていた。

「フハハハハハ！！ どうネ！！ 一ヶ月ほど消費期限が切れたキンモールの味は！！」

「って！！ また消費期限切れてんのかいいいい！！」

と、外の空気を吸って多少復活した新八がそうつつこみを入れながら、神楽の後頭部をバシンと勢いよく叩く。

「いたああああ！！ 何するアルか、この駄眼鏡！！ お前のせいでキンモール落として中身が漏れてしまったアル！！ どう落とし前つけてくれるアルか！？」

「それはこっちの台詞だつーの！！ ほとんどお前のせいだろうが！！ てか、なんで消費期限の切れた物しかないんだよ！！」

「知らないネ。ワタシはただ襖の奥から取りだただけネ。文句があるならそこで寝ている銀ちゃんに家ヨ、この玉なしが」

ペツと床の上に唾を吐き捨てる神楽。それを見た新八はピキィと青筋をこめかみに浮き立たせて怒り狂う。

「何してんだあ！！ このアマあ！！ いつの不良なんだよ！！  
ここは道路じゃないんだよ！！」

と、互いに額を擦りつけ合ってメンチを切る新八と神楽。その様子をすっかり蚊帳の外になった少女が呆然とした面持ちで見つめていた。

オロオロと辺りを見回していると、不意に今まで床の上に気絶していた銀時が凄まじい怒気を纏いつつ立ち上がる。その怒気に当てられたのが、今までメンチ切っていた新八と神楽はビクツと身をちぎこませて、ギギギツとゼンマイの切れたカラクリ人形のように、ぎこちない動きで銀時の方へと振り向く。

もちろん驚き怯えたのは少女も一緒であった。

どうして？　しばらく立ち上がれないほど多量に血を吸ったのに。

どうしてこの白髪の男は立ち上がれるの？

少女の動揺もそこそこに、銀時は屹然と面を上げ、

「てめえらあああああ！！　気絶した俺を放って何をギヤアギヤアギヤ叫んでんだよお！！　テメエらはあれか？　発情期にさしかかった猿ですか、このヤロー！！」

と、家全体が揺れるほどの怒声を放ったのであった。

数十分後。

銀時の怒りが冷め止んだところで、銀時を交えて目の前の金髪美少女へと再度向き直る。

金髪少女はブルブルと小刻みに身体を震わせ、未だに毛布にくるまっていた。

どうやら少女を完全に怯えさしてしまったようだ。

まあ、それもそうであろう。一方的に攻撃を仕掛けたのだから。

あれ？ でも先に襲いかかってきたのはあの少女なわけだから、お相子じゃね？

しかし、世の中は美少女は正義！！で動いている。

美少女が凄く得する世の中であり、例えば美少女が悪くても、すべて許される世の中なのだ。

あーあ、俺も美少女に生まれたかったぜ、コンチクショー！。

「……………銀さん、心の声が漏れてますよ」

「はっ！！俺としたことが、血を吸われたことがショックすぎて頭がヘンに？ ああ、どうしよう。早く病院いかねえと……………」

「

「ちょっと何自分だけ逃げようとしてるんですか」

ガシツと新八が逃げようとしている銀時の襟首を掴む。

「放せよ！！ いや、放してください！！ 後生だから！！ 何？  
吸血鬼なんて、そんなメルヘンなモン存在してたまるかぁ！！  
アレはほら！！ アレだろ？ 夏の暑さにやられた、少し頭が可哀  
想な女さ！」

「いや、今は秋なんですけど。つか、実際に銀さんの血を吸ってま  
したよね？」

「いやー！！ 俺の身体の中には血なんてねえ！！ あの子の口か  
ら垂れてるのは俺のトマトジュースさ。糖分99%の」

「嘘つくなあ！！ どう見てもあんたの血ーでしょうーが！！ つ  
て、銀さんまた血糖値上がったんじゃないんですか！！ いい加減  
にしないとあんた糖尿病になりますよ！？」

と、銀時と新八が言い合ってる中。神楽だけは少女が吸血鬼と知  
った途端、目の色を変えて少女にまわりつく。

「ねえねえ、名前なんていうアルか？ あっ、さっきしたことは謝  
るネ。ワタシてつきり蚊の天人かと思ったアルよ。悪気があったワ  
ケじゃないネ。あっ、それで！！ 名前は何アル？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

と、未だ警戒を抱いているのか、神楽の問いに答える気配がない

少女。しかし、そんな少女に構わずに話をドンドン前に進める神楽。

「あっ！！　じゃあ、定春の女バージョンで、定子っていうのはどうアルか？　めっちゃ可愛い「エヴァ」思う……………」

神楽の言葉に割り込むように口を開いた少女

エヴァ。

どうやらよくない気配を感じ取ったらしい。あやうく自分の名が定子にされるところだったのだから、当然と言えば当然の反応であった。

「おお！！　エヴァアルか！！　中々に良い名前アルな。でも、やっぱり定子の方が……………」

と、神楽がもう一度その名を口にしてエヴァの方を見やるが、エヴァは半泣きになりそうな表情のままブンブンと拒むように首を振ったのであった。

その後ろでは銀時と新八が不毛な言い争いを繰り広げていたのであった。

「このオタク駄眼鏡が！！」

「何だとお！！　この糖分天然パーマネント！！　お通ちゃんを馬鹿にするなよ、コンヤロー！！」



**第4訓 吸血鬼には、あれでしょ？ 蚊取り線香が有効でしょ？（後書き）**

ハイ、今日はここまで。中々更新が続かずすみません。ようやくエヴァの名前が出せました。

次はエヴァをこれからどうするかという話に入ります。

これからの展開が難しいですが、頑張りますのでよろしくお願いします。



## 第5訓 吸血鬼飼うって？ 食費かからないならいいよ。

銀時と新八は顔を二倍に腫れ上がった、実に悲惨な体裁のままエヴァに向き直る。いや、強制的にと言った方が適切だろうか？

二人の言い合いにぶち切れた神楽は暴力で事を強制的に収めたのだ。

夜兎族である神楽に二人は手も足も出ず、散々に殴られたり蹴られたりしたのである。

銀時は鼻から鼻血を垂らしながら、

「………んで？ その、なんだ？ エヴァつつたか？ あのよ、その吸血鬼なのか？」

「………」

銀時の問いにコクリと静かに頷くエヴァ。その表情からは強い警戒の色が窺えた。

「はあ、マジかよ。まさかこの世にメルヘンな生物が存在するとはよお。てつきり俺の中の妄想が作り出したモンだと思っていたが、まさか実在するとは。神も仏もねえよ、コンチクショー」

と、顔を手の平で覆い、絶望を含んだ声音で呟く。

意外とオカルトとかホラーが苦手な銀時は、その象徴である吸血鬼が目の前にいることに嘆いた。

願わくは夢であつて欲しい。しかし現実というものはかくも残酷なものだ。

「銀さん、そう何度も確認取らなくても。それに、ほら。物は考えようですよ。この前の蚊の天人より、エヴァちゃんの方が可愛くていいじゃないですか。役得ですよ、役得」

「はあああああん？ 役得つて、一体だれ得だよ？ 俺のこと言つてんのか？ 生憎だが俺はそんな特殊な性癖は持ち合わせてはいねえ！！」

と、新八の言葉を聞いて余計に神経を逆なでした銀時が叫ぶ。

その声にビククリしたのか、エヴァはブルブルと身体を震わせて小さな肢体を更にちぢこませる。

「ああ~~~~！！ この天然パーマネント！！ 何エヴァを怯えさせてるネ！！」

と、エヴァの横に座りながら酢昆布を嚙っていたが、喚き散らす銀時の額へとエルボーを食らわす。

見事にエルボーを食らった銀時は後方へと激しく突っ込み、襖に頭から突き刺さる。

銀時はあまりに急な神楽の攻撃に悲鳴を上げる間もなく、襖に頭を埋没させピクピクと身体を震わせる。

その光景を見たエヴァは余計に怯えて鬱ぎ込むばかり。

流石にこのままでは状況が進まないのに気づいた新八は、気絶した銀時を襖から引つ張り出し、暴れないように荒縄でグルグル巻きに縛った。

それから神楽にも釘を刺し、ゴホンと咳払いした後、エヴァに向き直る新八。

「さてと………、エヴァちゃん。いきなりで悪いんだけど、この後どうする？」

「………この後？」

「そう」

新八にそう問われ、エヴァはしばし黙考した。

これからどうしよう………。

少なくともここにはいられない。吸血鬼とばれた時点で、それは決定事項であった。

この神楽という少女は自分に友好的に接してくれるが、いつ手の平を返して襲ってくるか分からないいし、この気絶してる白髪の男は自分のことをあけすけに怖がっている。

この眼鏡は………、どうでもいいや。

「………よく分からない。吸血鬼の私にはどこにも居場所がないもの。どこに行ったらいいか、何をしたらいいのかよく分からない………」

と、エヴァはポツリと呟く。

それは自分の本音であつた。吸血鬼になつて数十年の間、一人で安住の地を求めて旅していた中で行き着いた結論であつた。

吸血鬼は人間の敵だ、害虫だ、どこに行つてもそう罵られ後ろ指をさされ、理不尽な暴力をこの身に振るわれた。

そんなことがあつてからか、私は人間が少し怖くなった。元・人間なだけに余計に。

しかし、私たち吸血鬼は人間がいないと生きていけない種族。それは猫の身体に規制する蚤のような、実にちつぽけで惨めな存在。

しばらく沈黙が続く。どんな風に声を掛けたいのか、新八も神楽も分らない様子であつた。

しかし、そんな沈黙を一人の男が破る。

その男とは気絶していた白髪の男

坂田銀時

であつた。

「……くだらねえな、全くよお。そんなちつぽけなことを悩んでんなら、はなっから考えなきゃいいじゃねえか」

「銀さん！？　いつから起きてたんですか？」

「ついさっきな。おい、ガキ。俺の新鮮なトマトジュース啜っておきなから、逃げようなんて思つてねえよな？」

銀時の発した言葉にエヴァは伏せていた目を大きく見開く。

この男は何を言っているのだろうか？　ついさっきまで私のことを怖がっていた癖に。

エヴァはそう心の中で銀時の悪態をつくも、内心銀時の次の言葉に期待していた。

その期待は、やがて確信に変わった。

「いいか、テメエはこの俺に宣戦布告したんだからな。俺を負かすまでここから出られないと思えよ。ファンタジーな存在に負けたなんて知られたら、恥ずかしくて面も歩けねえしよ」

「銀ちゃん！！　本当にエヴァここに置いてもいいアルか！！」

「ああ、侍に二言はねえ！！　そのかわり、諸々の世話はテメエがしろよ。トイレの世話しかり散歩の世話しかりだ」

「勿論ね！！　歌舞伎町女王は嘘つかないネ！！」

と、意気込んで声高らかに宣言する神楽。

「って！！　前もそんなこと言っていたよね！！　定春を飼うときも！！　つか、エヴァちゃんを定春と同等に扱わないで下さいよ、銀さんに神楽ちゃん！！　ゴメンね、エヴァちゃん。イヤだったよね？」

「・・・・・・・・」

エヴァは新八の問いにフルフルと首を横に振った。

こんなに楽しい時間は吸血鬼になって初めてだった。

それと同時にこの人間たちは心の広さに感謝した。吸血鬼である自分を受け入れてくれてくれた人間は彼らが始めてであった。

「……………ありが、とう」

エヴァは小声で三人にお礼の言葉を口にする、吸血鬼になってから初めて笑みを浮かべた。

「そう言えば、銀ちゃん。吸血鬼って何を食べるアルか？」

「はあ？ そりゃあテメエトマトジュースだろーよ。絞りたてのやつ」

「いや、違っでしょ？ “吸血” 鬼なんですから、血でしょう？」

「おお！！ なら、食費が浮いて良いアルな！！ ところで銀ちゃん血って美味しいアルか？」

「さあな？ 本人に聞いてみたらいいんじゃない？」

「おお！！ それもそうアルな！！ エヴァ……………！！」

神楽はエヴァに向かって飛びつくようにして抱きついた。その反動の強さに思わず蹠踉めくエヴァ。それに構わずエヴァに尋ねる神楽。

「血って美味しいアルか？　ねえねえねえ、どうアルか？」

エヴァは耳元でしきりにそう尋ねてくる神楽を煩わしいと思うが、久しぶりに触れる人の温もりを感じ、心からの微笑みを浮かべたのであった。

**第5訓 吸血鬼飼うって？ 食費かからないならいいよ。（後書き）**

はい、今日はここまでです。この作品は毎週水曜日に更新しようと思います。

エヴァが万事屋に仲間入りしました。さあ、これからどういった展開にしようか、考えをまとめてみようと思います。



## 第6訓 吸血鬼と触れあってみよう。だけど、血を吸うのはかんべんな。

「さて、この問題も一段落したところで

」

「ところで、何ですか？」

と、妙に部屋を暗くし懐中電灯を顔の下から照らしながら呟く銀時を、白けた面でつつこむ新八。

同じく酢昆布を囓る神楽と、その横に未だ状況が理解できていないエヴァも銀時の周りに集まる。

「ああ？ あれだよ、ほらエヴァがこの万事屋にしばらく暮らすからよ、それを記念して……………」

と、言葉を一旦句切り部屋の電気をつける。

すると、四人の目の前にガスコンロの上に乗った土鍋が姿を現した。

どうやら中身は入っておらず、透明な汁だけがグツグツと煮えていた。

「……………これなんですか、銀さん」

と、無表情な新八がポツリと呟いた。

「ああ？ 何って鍋だよ、鍋。これがグラタンに見えるのかね、新八君は」

耳を穿りながら小馬鹿にした口調で言う銀時に、新八はバンツとテーブルを叩きながら、

「んなもん見たら分かるわ！！ 僕が言いたいのは何でいきなり鍋パーティーを開始するっていうのと、鍋の具が何にも入っていないのかということなんだよッ！！」

「そうアル！！ なんで汁だけなんだヨ！！ いつもならエノキと白菜くらいは入っているネ！！」

「オイッ！！ 失礼なことを言うな！！ 豆腐も入ってるじゃねーか！！」

ズゴオオオオオ！！！！

神楽と新八は銀時の言葉に盛大にこける。

ただ一人この流れについていけないエヴァだけがポカンとした表情で固まっていた。

「たいして大差ねーじゃねーかぁ！！！！ って、僕が聞きたいのはそんな事じゃなくて！！ なんでエヴァちゃんの歓迎会するのに鍋パーティーするかを聞いてるんですよ！！」

と、復活した新八が再度そうつつこむ。

「ほら、昔の人も言ったじゃねえか。鍋は人生の系図。みんな仲良く鍋突きあつて親睦を深め合うのも、古来の人の知恵なんだよ。俺たち現代人はそれに肖っているだけだよ」

フツとしたり顔で呟く銀時の顔面に神楽の正拳突きがめり込む。

銀時は鼻血を垂らし、目元を黒く腫らしている無様な恰好であった。

「フン、一丁前に何いうアルか。ただ単に金がないからケチっただけでネ!! この歌舞伎町女王の目は誤魔化せないヨ!!」

「あゝ、やっぱり? 僕も薄々そうだと思ってました。最近依頼がないから金欠気味だし、ご馳走買う金がないですしね。にしても・・・、汁だけとは。少しくらい奮発してもバチ当たらないですよ!?!」

「あゝ、そう言ってもよ。最近の天候不良で野菜買うにもバカに何ねーんだよ。銀さんだつてな、本当はお前らにいいモン食わせてやろうと努力したさ。でもよ、努力は中々に報われなくて」

「ふゝん、へえゝ。じゃあ、銀さん。さっき机の上にあったジャンプ二冊は何なんですか?」

「うえ!? ああ、ほらジャンプが俺を呼んでいるような気がして、気がついたらついレジへと・・・」

「「巫山戯るなあああああ!!!!!!」」

ドゲシイイイイ!!!!!!!!

「グボアアアア!!!!」

怒り狂った新八と神楽は銀時の身体に見事な跳び蹴りを食らわす。もろに食らった銀時は勢いよく回転しながら頭越しに襖へと突き刺

さる。

「ついつてなんだ！！ ついつて！？ テメエ絶対確信犯だろーが！？」

「そうアル！！ 最初から鍋の具買う気なかっただろーがああああ！！！！」

ドガツ！ バキィ！ グシャ！！ バキドカバキドカカカ！！！！

「ちょ、ちょ、まつ！！ 悪かったって！！ ほんと！！ マジ、悪かったって！！ その、人の、グハア！！ 話をゴボォ！ 聞けっつーの！！！！」

新八たちの攻撃を食らっていた銀時は弁明しようとして試みていたが、あまりにしつこすぎる攻撃に銀時はブチ切れてバネ仕掛けの人形のように跳ね起き、散々に殴りつけてきた神楽と新八を吹っ飛ばす。

「うおおおおお！！！」

「ぎゃあああああああ！！！」

今度は二人が頭から襖へと突き刺さる。

「ったくよお。人が大人しくしてれば調子にのりやがって。銀さんはあれか、サンドバックですかこのヤロー」

と、気怠そうに肩を回しながら呟く銀時。

「んだよおー！！ 元はと言えばこんな巫山戯た鍋出してくる銀ち

やんが悪いネ！！　ワタシらは悪くないヨ！！」

ガバアアア！！　と襖から顔を出しながら叫ぶ神楽。

「そうですよ！！　だいたいエヴァちゃんが可哀想でしょ！！　せつかくの主役なのに、こんなしけた鍋出されちゃ！！」

と、神楽と同じく襖から顔を出しながらつつこむ新八。

するとその様子を呆然と見つめていたエヴァが、

「・・・・・・私は吸血鬼だから、別に食べ物食べなくても平気なんだけど」

と、申し訳なそうに答える。

そんなエヴァに神楽は指を突き刺して、

「ダメアル！！　そんなだから身体が貧相何だヨ！！　血ばっか食っちゃダメネ！！」

「いや、だから私吸血鬼だから血を吸って当たり前なんだけど・・・」

と、うんざりとした表情で答えるエヴァ。

「つか神楽ちゃん、いつもたくさん食べてるのに、なんで少しも成長しないブバアアア！！！！」

新八がそう口を開くと、神楽はその頬に見事なエルボーを食らわ

す。

新八は顔を変形させながら壁に身体を打ち付ける。

「五月蠅いネ、この駄眼鏡。ワタシの食欲はあんくらいじゃちつとも収まらないアル。それにワタシは成長期ネ。これからグングン成長するアル!!」

「つーか、いつかテメエ縦じゃなくて横にでかくなブオワアアアアアア!!」

と、失礼なことを口走った銀時も手にした番傘の一殴りで黙らせる。

「ったく、失礼なオスどもネ。いつかワタシがナイスバディな女になったら、見返りとして酢昆布一年分献上するアルヨロシ」

と、首に下げた襖を抜き取りながら憚然とした表情で呟く神楽。

その間にも鍋の中の汁は溢れんばかりに沸騰させ、それを興味深そうに見つめるエヴァ。

神楽にぶつ飛ばされた新八と銀時は喋るのもままならないまま、ピクピクと身体を断続的に震わせるのであった。

さて、万事屋の鍋パーティはこのままお開きになるのだろうか？

その結末は次回へと持ち越しである。

第6訓 吸血鬼と触れあってみよう。だけど、血を吸うのはかんべんな。(後書

今日はここまでです。昨日は投稿できなくてすみませんでした。

次の話は闇鍋パーティーにしようかな？ ドバドバと入れるから面白そうじゃないね？

## 第7訓 吸血鬼とカツラとペンギンみたいな何か

さてさて、争いが一段落した頃。

銀時たちはさっきより散乱した室内の中で、机の上に置かれたガスコンロの上で、グツグツと煮えている土鍋の周りをグルリと囲むようにして集まっていた。

「……………それでどうするんですか。やっぱり何か具がないと格好が付かないでしょう色々」と

「そうアル。ワタシせめてやつすい豚肉でも良いから食いたいアル。こっ、しゃぶしゃぶと」

神楽は豚肉をしゃぶしゃぶするマウントポーズを取りながら、頬を膨らませ唇を尖らせて呟いた。

「へっ、しゃぶしゃぶだと。んなもんあったら俺が食いたいわ。大体テメエらは口を開くと、すぐしゃぶしゃぶ言いやがって！！あれか？ テメエらはしゃぶしゃぶにされる豚の気持ちが分かってるのか、ああん！？」

「って、どんだけあんた豚に感情移入してんですか！？ 銀さんもいつもは躊躇無くしゃぶしゃぶを口に行っているのに！？ 都合の悪いときだけ豚を擁護しないでくださいよ！？」

バンツ！！ と机が強く振動するほどに手の平を叩きつけた。

ガスコンロの上に置かれた土鍋が揺れ、中身に入った汁が少量に



零れた。

すると、汁が零れるのと同時に、

「フハハハハハ！　銀時、この時を待っていたプロボオアアアアア！？」

高笑いを上げながら窓を豪快に突き破った人物、それは攘夷志士の桂小太郎と相棒の宇宙生物であるエリザベスであった。

桂とエリザベスはあまりに派手な登場だったためか、家主である銀時の怒りを買って木刀をぶん投げられたのだ。それをもろに食らった桂はバランスを崩し、玄関に通じる襖を突き破って豪快に転がったのであった。

「うつせーよ、ヅラ。空気を読めよ、空気。誰もテメエなんか読んでねえよ」

「そうネ！！　お前のせいでエヴァが怯えて布団から出てこないアル！！　どう落とし前つけてくれんだゴルアアアッ！！」

と、ボロボロになった桂にトドメをさしにかかる神楽。

ドカ、バキイ、ドカカカ！！！！

と、殴打する音が聞こえながらも、銀時たちはどこ吹く風。

唯一毛布にくるまったエヴァだけがチラチラと玄関の方へと視線を向けて、暴虐の限りを尽くす神楽の様子を伺うのであった。

数十分後。

顔が二倍に腫れ上がった黒髪の貴公子こと桂小太郎とエリザベスが、銀時たちの輪に加わりグツグツ煮える鍋を見下ろしていた。

「・・・・・・・・・・時にして銀時」

「・・・・・・・・・・ああ、なんだよ」

銀時は鼻をほじりながら桂の問いかけに答える。

桂は鍋と毛布にくるまっているエヴァを交互に見やりながら口を開く。

「この鍋に具がないのと、ソファアの上を占領している毛布の固まりに、俺はさつきから疑問を抱いているのだが・・・・・・・・・・」

「具がないのはお金がないからで、毛布にくるまっているのは、今回うちで預かることになったエヴァンジェリンさんですよ」

と、新八が桂の質問に答える。

「えっ、あ、ん、じぇりん？ 何だ、その長い名前は？ どういう風に呼べばいいのだ？ というか姿を現せ、娘。己の姿を恥じるものではない。むしろ俺は君の姿がピチピチのお嬢さんより、ムチムチのおばさんの方がタイプだ。だから姿を恥じる必要はないぞ、うん」

と、途中から自分の好みの女性像を語り始める桂。その頭を神樂がバシンツと叩く。

「なにエヴァを口説いてんだテメエ！！　つか今の発言はエヴァに失礼アル！！」

「何するんだリーダーああああ！！　俺はだな、その毛布にくるまる者に少しでも緊張を和らげようと・・・」

「無駄だぞ、神樂。こいつはな、昔からこついう奴だよ。話の趣旨が外れることなんざ日常茶飯事。それにこいつの好みの女は昔から年増って決まってるんだよ」

すかさず横から銀時が茶々を入れる。

それに過敏に反応したのは勿論桂である。

「何を言う貴様！？　俺のことはともかく、貴様の方こそ問題大ありであろうが。人の話は聞かないわ、やる気はないわ、死んだ魚の目をしてるわ、銀髪で天然パーだわ、甘い物ばかり食って糖尿病寸前だわ、貴様の方が俺より問題多すぎではないか！！」

「んだと、ごらあああ！！　喧嘩うつてんのかコンヤロー！！」

「それはこっちの台詞だ、銀時！！」

顔を近づけあって互いにメンチを切る桂と銀時。バチバチと両者の間で火花が飛び交う。

銀時たちを蚊帳の外に放り出し、新八と神樂はエリザベスと会話

を展開していた。

えっ？ あの二人は放っておいていいのかって？ いつものことだからいいんだよ。

「それでエリザベスさん。今日は一体何のようでここに来たんですか？」

【実はしばらく出番がないということに桂さんが怒り出しまして。こうして実力行使に出たというわけなんです】

「そうアルか。まあ、たしかに最近ヅラは出番がないアルから、話は分からないことはヨ。しかし、よりもよって一番大切な時に来なくても良いのに。本当気のきかねえーな、あのヅラはよ」

「まあまあ、そう言わないで。せっかく来て貰ったんだし、もうこのまま鍋パーティーに参加して貰おうよ。人数は多い方が楽しいしさ」

「ケツ……、これだからこの眼鏡は。これ以上人数増やしてどーするアル！？ こんなしけた具でこれだけの人数の腹が満たされると思っているアルか貴様~~~~~ッ!？」

「うおおおおお!! ちょ、神楽ちゃん落ち着いて!! 僕を襲っても鍋の具は出ないから!! 何か内蔵的な物が出るだけだから!!」

新八の胸ぐらを引っ掴み持ち上げる神楽を、新八は必死に押さえようとする中、エリザベスはというと一人呑気に茶を啜りながら、

【あつ、別にその眼鏡のホルモンでいいんじゃない？ この際】

と、書いた札を上げる始末。

「おい、こら！？ ふざけんじゃねえぞ！！ この着ぐるみ野郎！  
！ 僕のホルモンは僕のモンじゃ い！！」

と、渾身の雄叫びを上げてどうにかこうにか神楽の手から逃れる。

すると、銀時と取っ組み合いをしていた桂がこちらの方に視線を向け、

「喜べ、皆のもの！！ この俺がこの場を打開する良い案を思いついたぞ！！」

いやに自信満々な表情を浮かべる桂であった。

「んで？ 何だよ、良い案って？」

「ふむ、さっき新八君のホルモンを鍋に入れるというので思いついたのだが……………」

口籠もり神妙な表情を浮かべる桂を見て、銀時たちも真剣な顔つきになり、辺りに何とも言えない緊張が走る。

「……………皆で闇鍋をしようと思うのだが！！」

ドオオオオオオン！！！！

桂の発言の後、一瞬妙な空気が辺りを包み込んだが、

「アホかああああ！！！！」

と、我に返った銀時と神楽によって盛大なツッコミを頭にお見舞いされるのであった。

**第7訓 吸血鬼とカツラとペンギンみたいな何か（後書き）**

今日はここまで。いやに短くてすみません（汗）。

今回は導入部って事で勘弁してください！！

## 第8訓 闇鍋をはじめよう！ 前篇

闇鍋。

それは鍋界の中でも禁断の鍋と称され、食すものには必ず死が訪れると云われる。

その闇鍋がここ『万事屋銀ちゃん』で誕生しようとしていた。

桂、エリザベス、銀時、エヴァ、神楽、新八、の順に机の周りを囲み、机の真中に置かれたガスコンロの上でグツグツ煮える鍋を見下ろしていた。

重々しい雰囲気の中、それを看破するかのように口を開いた人物がいた。

もちろん、我らが主人公

坂田銀時である。

彼は自分が殴って眼の下に青痣ができた桂を見やり、いつもの仏頂面のまま口を開いた。

「んで？ テメエが立案した闇鍋？ だっけ？ あれさ、大真面目で言ってるの？」

「そうだが。何だ、銀時。貴様の低能な脳みそでは嘘か真かも見抜けなんだか？」

「何だと、ゴラァ！！ 俺はなあ！！ 何が悲しくてお前と闇鍋な



んざしくちやいけねえの！？ どうせするなら某主人公らしく美少女に囲まれてやりたかったわ！！」

銀時の言葉に反応したのは、エヴァの横に座っている神楽であった。酢昆布を鍋汁で煮ていた神楽は銀時の放った言葉に猛然と食らいついた。

「何ぬかすアル！！ この天然パーマネント！！ ワタシのこの美貌にどこが不満があるネ！！」

「ああ〜ん？ 誰が美少女なんですか？ そういう冗談はエイプリールフルだけにしとけ」

「何だとゴルア！！ もういつペン言ってみろッ！！ このクサレ侍~~~~！！」

ダンッ！！ と机の上に片足を乗せ、銀時の襟首を怒りにまかせて持ち上げる。それからまるでカクテルを振るバーテンダーのように、華麗な動作で銀時を激しく揺さぶる。

その動きに合わせて鍋の汁が大きく波打つ。

「ちょ、ちよつと、ま！！ 神楽、お、おれが、わる、わるかった、つて！！」

銀時は脳をシェイクされながらもどうにか謝罪の言葉を口にする。

しかし、怒りで我を忘れている神楽は銀時の言葉に耳を貸すわけもなく……。

まるで縄張りを荒されたゴリラのように怒り狂っていた。

それを見かねた新八が二人の間に入り、

「神楽ちゃんに銀さん！！ いい加減にしてくださいよ、アンタら！！ 二人が暴れたから汁しか入っていないのに、大方鍋から零れちゃいましたよ！！」

と、鍋の中を指さしてそう怒鳴ると、あれだけ怒り狂っていた神楽も大人しく矛を収め、銀時の襟首から手を離し自分の席へと再び腰を下ろす。

どうやら食い物が絡むと大人しくなるようだ。

さすが大食い娘。

さて、どうにか闇鍋を開始するかという雰囲気になった頃、今まで沈黙を保っていたエヴァが恐る恐る手を挙げた。

「……あの、ところで闇鍋って一体なんなの？ 何を入れる鍋なの？」

と、素朴な質問を口にした。

その質問に律義に答えたのは、お馴染みのオタクメガネ新八である。

おいっ！！ オタクメガネっていう誤解を招く説明は止めんかい！！

という言葉が聞こえたが、華麗に無視して。

「あのね、そもそも闇鍋っていうのは……、簡単に言うと何でもアリな鍋かな」

「何でも？」

「そう、食べられるものなら何でも入れていいんだけど。極たまゝに食べられないようなものも平気で入れる人もいるから、その点が闇鍋の恐ろしいところなんだよね」

新八は何か言いたそうにチラッと銀時の方に視線を向ける。

その視線に気づいた銀時がジト目で、

「……さっきのチラ見はなんだよ、ぱつつあん」

「別に」。まあ、そういうわけでエヴァちゃんも何か入れたいものがあるんなら、遠慮なく入れてね。あつ、でもなるべく食べ物でお願いします……！」

と、最後のセリフは血走った目で念押し新八であった。

エヴァはその気迫に押されてコクコクと何度も頷いた。

それから一時間後

。

全員各自用意した物を手に鍋の周りに集った。

「それで皆の物。ちゃんと用意してきたであらうな？」

「おう、こうなったら闇鍋でもなんでもやってるわ」

「そうですね。背に腹は代えられないですし」

「そうアル！！ 酢昆布ばかり食ってられないヨ！！ 何でも良  
いから噛みごたえのある物食いたいアル！！」

『マジに』

(・・・・・・この人たちの傍にいて良いんだろうか？)

と、それぞれ口にしたあと、一様に頷くと自ら用意した物を机の  
上に出すのであった。

## 第8訓 闇鍋をはじめよう！ 前篇（後書き）

短いですが、すみません。それと一日遅れてすみません（汗）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6193v/>

---

エヴァと万事屋銀ちゃん

2011年10月8日22時01分発行